

第3回越後平野における生態系ネットワーク推進協議会 議事要旨

■日時：令和4年2月14日（月） 10:00～12:00

■オンライン会議（Microsoft Teams 使用）

○議事

(1) 前回（第2回協議会）の報告

(2) 規約の改定

(委員A)

➤ 自然環境活用部会の議論も拝聴したい。

(会長)

➤ 生態系ネットワークを越後平野に根付かせるための生態系サービスについて検討するためには、自然環境活用部会の色々なアイデアは重要である。行政関係者も積極的に参画していただきたい。

(3) 全体構想（原案）について

(4) 今後のスケジュール（案）

(委員B)

➤ この構想を成功させるためには、市民の人を取り込み、味方につけることが重要。

(委員C)

➤ 次年度の計画にあるモデルプロジェクトは、核になってくる重要な取組である。自然環境活用部会であれば比較的コンパクトに試行していくことができるので、骨格になるプロジェクトは丁寧に検討しながらも、並行して、例えば地域や社会を情報発信しながら巻き込んでいくことを試行するような取組を、早めに立ち上げると良い。

(会長)

➤ 現行の内容では、取組が達成できたかどうかが見えにくいことから、生息環境づくりについては、目標年次に応じた数値目標を出してはどうか。例えば生息ポテンシャルを一つの評価基準として、越後平野が指標種にとって中長期的に見て持続的な生息

環境であり続けることを目標とするならば、ポテンシャルが現在の状態よりも低下しないようにする、という方針となる。例えば5年後、10年後、30年後に少なくとも現状維持、もしくはそれ以上の状態にする、減ったとしても80%くらいまで、といった目標値を定め、目標年次に向けてどう展開していくかを具体的に検討できるようにした方が良いと考える。

(委員A)

- トキに関する目標に関して、本土側での野生復帰の取組み等がどのように展開されるか、現時点では明確になっていない部分が多く、具体的な数値目標をはっきり掲げることが困難な面もあるだろう。ただし、何らかの目標があった方が良いと思うので、全体構想を詰めていく過程で、目標の記載については検討を重ねていくべき。
- 全体構想については、一般公開をされると思うので、シンプルにわかりやすさを重視にまとめるのが良いと考える。

(会長)

- 全体構想の中で分かりにくい表現やバランスの悪さがある場合は、もう少しスリム化しても良い。場合によっては要約版を作成するなど、わかりやすいものにすることが大事。首長・市民の理解を促しながら、地域の魅力や、今後の展開が議論できると良い。
- 全体構想の策定とともに実際に行動計画を具体的に検討策定していくことから、次回の協議会は非常に重要となる。開催にあたっては、可能であれば越後平野の自治体や佐渡市の首長にも参加いただき、生態系ネットワークを中長期的に進めていくための期待を是非語っていただきたい。
- 生態系ネットワーク事業は、自然環境に関わる基本的な部分を担保しながら、それを活かして地域経済に刺激を与えていくようなスキームである。この地域の魅力をもう少し「見える化」して地域ブランディング、イノベーション、そこにはもっと若い人たちの斬新な考えを組み込みながら、地域が閉塞的な状態にならないように考えていきたい。
- 社会インフラが将来劣化して放棄されていくことに備えて、防災減災の体制を整える流域治水の取組とグリーンインフラを関連付け、地域づくりの骨格にしていくことを目指していけると良い。

(委員D)

- この事業には期待するところが多い。モデルプロジェクトは、小規模でも良いので優先して実証実験のような形で出来ると良い。また併せて、わかりやすいHPづくりを提案させていただきたい。

(会長)

- HPを持つことで、協議会としてのまとまりや、ワーキングとしての繋がりなど、自分たちを主体として考えていく場が形成できる。また、このプラットフォームを核に継続して取り組む姿勢を見せることにもつながることから、良い方法である。

(委員E)

- 行動計画のところで、全体構想にかかる広報活動が非常に重要になってくる。HPを誰に向けて、どのような内容を中心に発信していくのかということは今一度整理することが大事。個人的な意見としては、市民は指標種に対して「価値が高い」とか「価値がある」という認識をあまり持っていないように思われる。広報活動の主旨において、指標種の価値を発信するか否かということから検討していく必要がある。

(会長)

- 市民との対話の場としてフォーラム等を開催する際には、一方的に生態系ネットワークの取組を紹介するのではなく、その場で市民に問うような形にするなど、意見集約ができる場にするとうい。フォーラムを、自然環境活用部会における議論などの情報公開や、取組自体の広報の機会と位置付け、首長も参加いただき、本音や期待を聞くことができれば、市民の理解も深まるのではないかと。
- 今年の実用生態工学会新潟においては、学術的な観点から生態系ネットワークの議論をする予定である。フォーラムと実用生態工学会新潟の双方が繋がるように、内容の重みやバランスに応じた演者の比率を違えて、聞き手の異なる集会を開催するのはどうか。

(委員C)

- 徳島河川国道事務所では2か月に1度発行しているデジタル雑誌に、「コウノトリ、ツルでつながる阿波の国」という連載記事や、関連ツアー、関連NPOの記事を掲載している。北陸地方整備局にも広報誌などあれば、活用を検討してはどうか。

(会長)

- 関係機関等からの意見について。1つ目の「市民県民からの意見を」に関しては、積極的に取り入れていくことが大事。フォーラム等やHPなどを通じて、市民県民からの意見を集約していき、みんなで地域を元気にしていく流れになることを期待している。
- 2つ目の「まだ定着していないトキを指標種としていいのか」という意見については、地方自治体が主体的に進めていくことが大事である。出雲市がトキによるまちづくりを進めている一方、トキが既に飛来している越後平野はチャンスがある。佐渡において既に密度効果のような傾向が現れており、本土に分散してくる可能性が高い状況。トキを通じて佐渡や他地域とのネットワークが広がっていき、地域をつなげていくということも生態系ネットワークで取組めると良い。
- 3つ目の「全体構想の策定に向けて各主体への丁寧な調整」については、関係機関担当者連絡会が非常に重要な役割を果たしている。各部会で協議された内容の実現可能性について意見を集約することが重要。

(委員A)

- 関東平野の生態系ネットワークにおいても、コウノトリとトキを指標種・シンボルとして取り組んでいるので、定着していないトキを指標種とすることには異論はない。ただし、越後平野の生態系ネットワーク形成の指標種にトキが選定された理由は丁寧に説明した方が良い。

(5) 国土交通省からの情報提供

(会長)

- 様々な事業において生態系ネットワークの概念を視野に入れながら進めていくことで、有機的に繋がっていくことが出来る。それぞれの事業を結び付けた地域づくりが目指せると良い。

以 上